

会期; 7/22(土)~8/16(水)

会場; 上福岡歴史民俗資料館 2階ホール

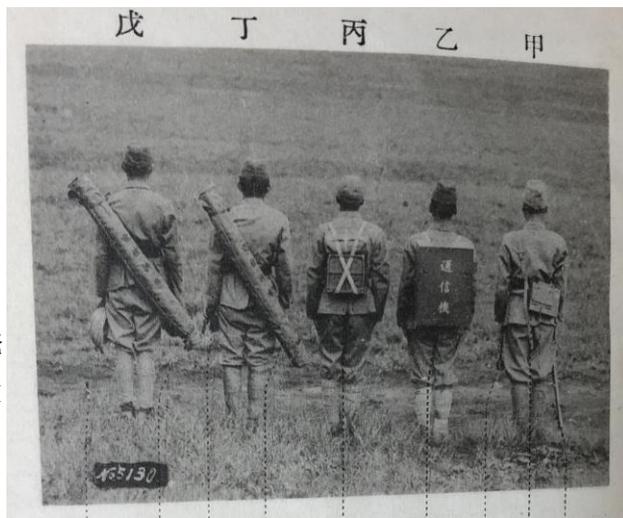
## 戦場の通信

### 九四式三号甲無線機

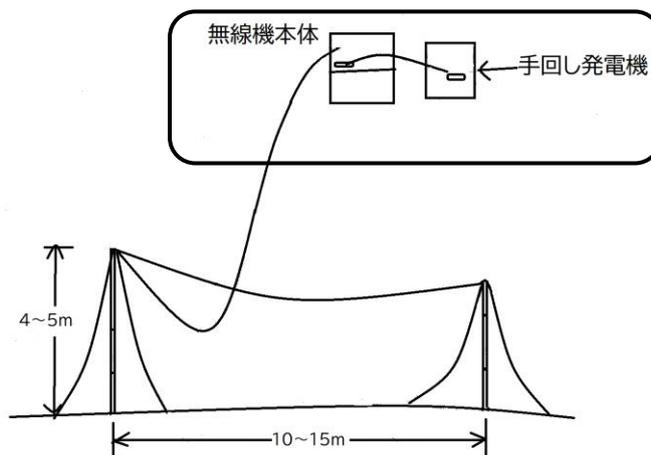
旧日本陸軍では、短距離通信通話用、遠距離通信用、対空用無線機など用途ごとに21種の多様な無線機が用いられたが、九四式三号甲無線機は最大通信距離80km、重量110kgの中距離通信用に開発された無線機である。昭和6年から開発が進められ、満州での冬季運用試験や陸軍騎兵学校での試験で改良が加えられ、昭和11(1936)年から制式制定された。

### 無線機類の運搬と設置

無線機や手回し発電機は、部品を含めて四号箱まであり、空中線(即席の無線塔)は、組み立て式で袋に入れられ、分擔携行要領図にあるように兵士が担いだり、馬を使って運搬した。

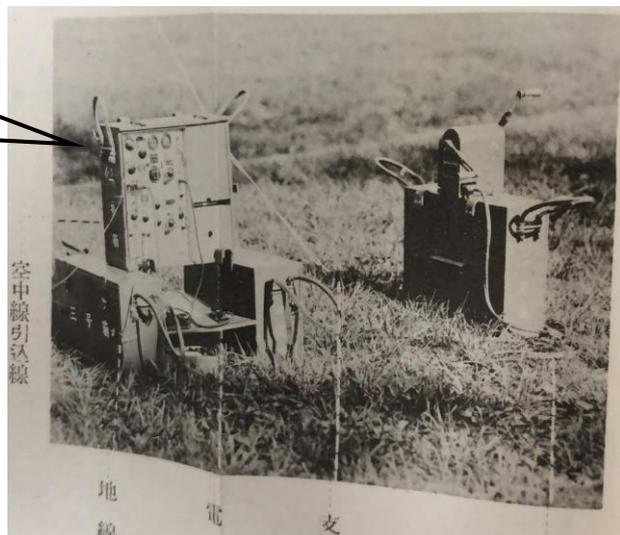


ぶんしょうけいこう  
分擔携行要領図(『九十四式三號甲無線機取扱法』附図第九) 無線機、発電機、空中線を兵士が運ぶ場合を示す(防衛研究所戦史研究センターのご好意による)



空中線設置と発電機、無線機の接続の様子

目的地に着くと空中線を4~5mになるように組み立てて、10m~15mほど離して設置した。無線機は、手回し発電機と空中線端子につなぎ、送受信を行った。無線機と手回し発電機は、師団通信隊のうち無線1個小隊を構成する6分隊(1分隊9名)が1台ずつもっていた。手回し発電機は、2名が1分あたり70回ハンドルを回して必要な電力を得た。



機器開設要領図(『九十四式三號甲無線機取扱法』附図第八「機器ノ設置」) 手回し発電機と無線機の接続の様子を示す(防衛研究所戦史研究センターのご好意による)

## 福岡受信所

福岡受信所開局歓迎緑門(昭和2年)

### 福岡受信所の開局

大原二丁目地内には、現在ヤオコーふじみ野大原店とKDDI総合研究所があるが、昭和43(1968)年まで福岡受信所の局舎や社宅が建っていた敷地



であった。福岡受信所は、大正 14(1924)年 10 月に発足した「日本無線電信株式会社」に対し、同年 12 月にアメリカ・南洋・極東方面から無線通信を同時に7局以上受信可能な「中央無線受信局」を設置するよう指示する命令書に従って建設され、昭和 2(1927)年 4 月に開局した。

### 福岡受信所の沿革

福岡受信所が開業した昭和2(1927)年は村を挙げての祝賀行事が行われ、南古谷村<sup>ししまい</sup>の獅子舞や大井村のはやしなども催された。祝賀行事の決算書には、約 250 円弱の費用がかかったことが記されている。小学生教員の初任給が、40～45 円、大工の1日の手間賃が 3 円 10 銭の時代にかなり盛大に行われたことがうかがわれる。

さて受信所の施設内には、社宅、共同浴場、テニスコートが設けられ、子どもの服装も地元とは異なり「都会の人

たちがやってきた」という印象だったという。受信所は通信省の意向で国際電気通信株式会社の受信所となった。昭和 16(1941)年、海軍技術研究所の委託で電波技術開発にも携わるようになり、戦況の切迫に伴い

直接電波兵器を開発するようになった。終戦後は、逓信省、電電公社の所管となったが、昭和 28(1953)年に国際電信電話株式会社が設立され、国際電話通信業務の一翼を担うようになった。しかし、高度経済成長に伴う宅地開発による都市雑音の増加で電波環境が悪化、空中線用地の大半が借地だったため、パッチワーク状に売却されると安全対策のため空中線の保守に支障をきたすようになった。そのため昭和 43(1968)年8月に回線の移設を終えて、業務終了式を行った。当時の新聞記事には、「日本の耳」姿消すと報じられた。

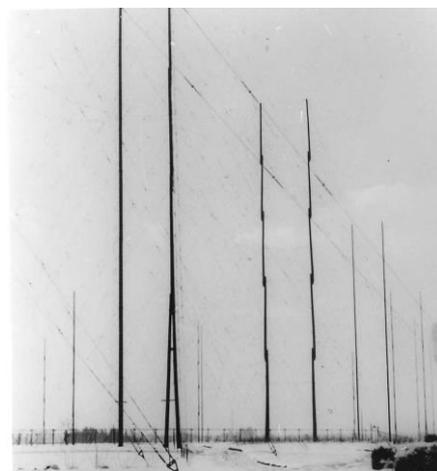
## 戦時の手紙～軍事郵便～

### 軍事郵便とは

日本で軍事郵便の制度がはじまったのは、日清戦争(明治 27(1894)年)からである。戦地から内地及び戦地から戦地へは無料、内地から戦地へは、国内料金で差し出すことができた。戦地からは野戦郵便局(陸軍は「野戦郵便所」、海軍は、「艦船郵便所」あるいは「海軍軍用郵便所」)から差し出した。軍事郵便には、兵士たちの家族への想いや出征先での体験、家族の側からは、出征先での安否への強い想いが伝わってくる。

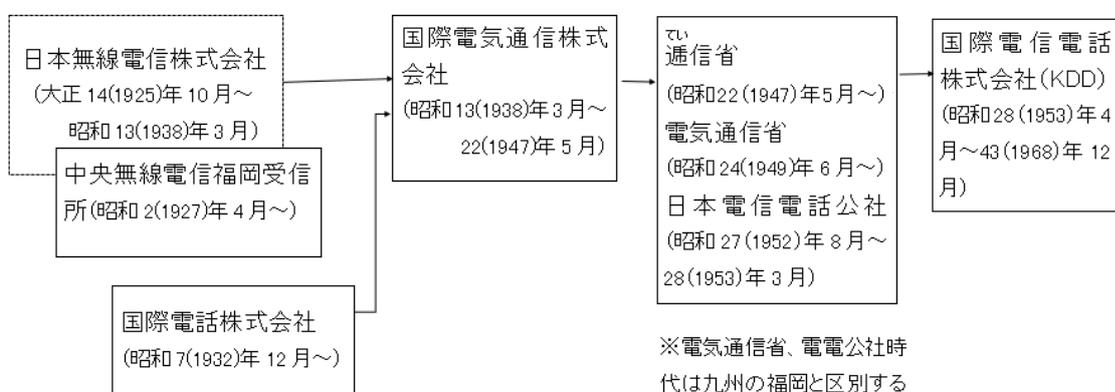
### 福田屋文書の軍事郵便

福田屋文書(追加分)の昭和期の書状 221 通のうち、純粋に軍事郵便でないのは、39 通で、そのほか 2 通が入隊や除隊のあいさつである。180 通前後が軍事郵便に相当することになり、戦地での体験や家族への想いや感謝が生々しくつづられている。シンガポール陥落の高揚した気分、慰問袋が届いた感謝、友人の戦死の悲しみなどが書かれた

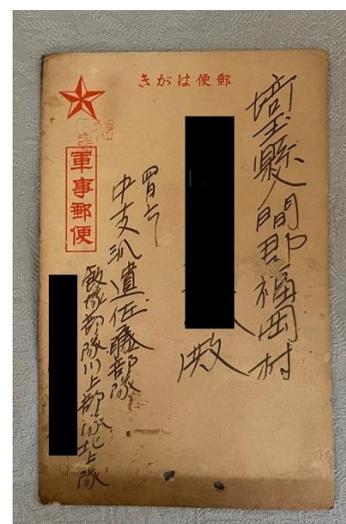


北野地区に林立する無線塔 (昭和 29 年)

### 福岡受信所の所管の移り変わり



※電気通信省、電電公社時代は九州の福岡と区別するため「武蔵福岡受信所」となった。



軍事郵便の封筒(陸軍)

手紙など 10 通選んで展示した。慰問袋を受け取った感謝の手紙を掲載する。

○戦地へ行っている甥から伯母あての手紙  
拝啓

伯母様 本日有難く慰問袋拝受致しました。御厚意深く感謝致します。自分出征以来色々御心配下され誠に有難う存じます

お蔭<sup>かげ</sup>にて自分その後元気に軍務に精励致してをります。御安心願ひます。今度司令部務となり、兵器部に勤務致すこととなりました。又七・八月頃、中隊・賀島隊に復帰する予定です。軍隊生活も一年近くなるのでやうやくなれて参りました今後ご指導の程願ひ致します。お祖母様・新宅の皆様にもよろしく願ひ致します。先は御礼迄 乱筆にて失礼致します

四月二十一日 不一



慰問袋は、市町村長から陸海軍の恤兵部<sup>じゆうへいぶ</sup>を通して各部隊あてに送られた。慰問袋には、子どもや女学生が書いた作文や絵が必ずといっていいほど入れられ、お守り、娯楽品、日用品なども入れられた。部隊に属する兵士個人あてに手紙が入られることもあった。



会期;8/22(火)~9/10(日)

会場;上福岡歴史民俗資料館 2階ホール



ふじみ野市内にみられる関東大震災による建造物の被害

ふじみ野市(旧上福岡市域)は、関東大地震の震央域であった神奈川県小田原付近から、北北東方向におよそ 60km 離れたところにある。当時の福岡村には、台地の東縁部と荒川低地に住居が集中していた。大震災の被害は、棟瓦<sup>むねがわら</sup>や屋根の歪み<sup>ゆが</sup>、瓦の落下、壁の剥落<sup>はくらく</sup>などがハケ地区(福岡三丁目)の江戸屋、福田屋、星野足袋店、中福岡中ノ島の M 家、下福岡の早船屋の建物に顕著<sup>けんちよ</sup>にうかがわれた。

### 早船屋及びその付近の震害

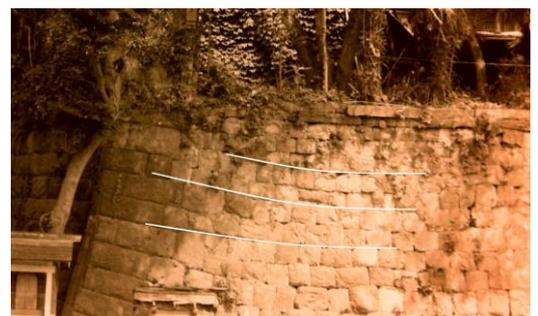
居住者からの聞き取りにより、当日は寄合で集まって台所で煮炊きをしていたら、母屋の東側にズシーンと強い揺れがあり、南北に長い台所の梁<sup>はり</sup>が落下したという。このことから最初は南北方向に一時的に強く揺れたが、軟弱地盤のため揺れの方向が変わり、東西方向にゆさぶるような強い揺れがあったためと推定される。早船屋の北東 80m の地点で北東-南西方向の地割れが見られたが、地盤が川沿いに横滑り<sup>よこすべ</sup>したためと思われる。

### 福岡河岸の震害

旧福田屋の東面の石垣は面の湾曲はそれほど目立たないが、石積み<sup>いしづみ</sup>の状態は乱れている様子がうかがわれる。吉野屋主屋(現存せず)は、瓦の落下個所から北北東と西北西の方向の強い揺れに見舞

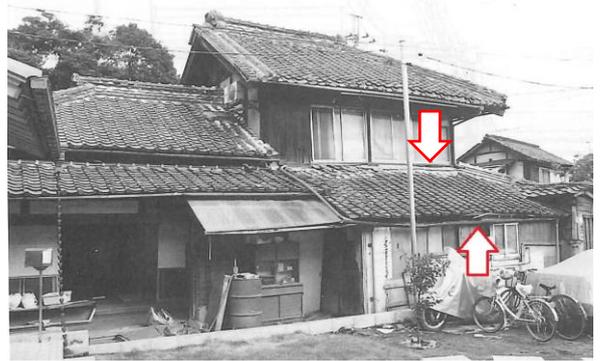


平成 9(1997)年ごろまで残されていた早船屋の建物<sup>けた</sup>。桁方向からの強い地震波をうけたとみられ、瓦と下屋屋根が波打っていたようすがうかがわれた。

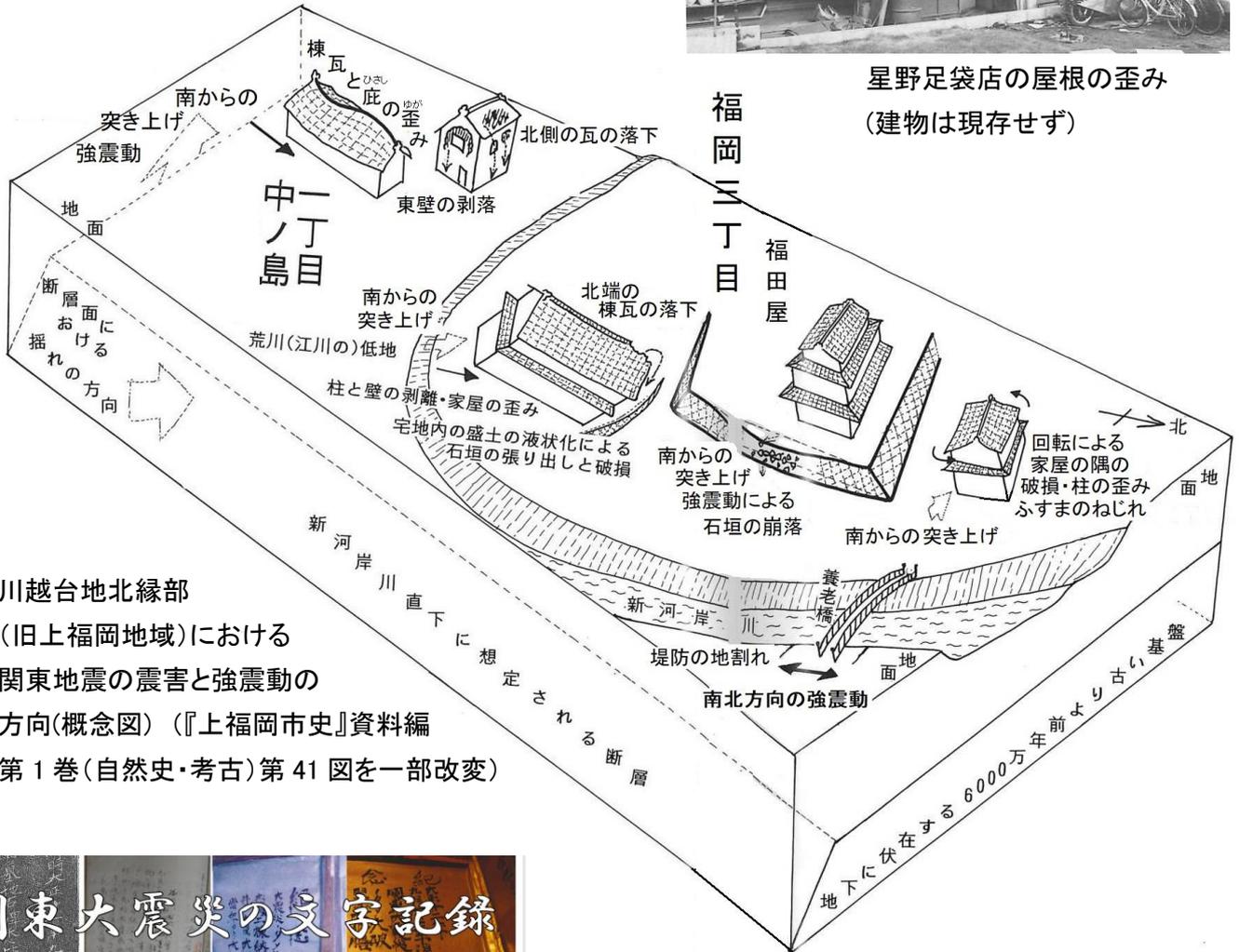


震害でゆがんだ福田屋の東側の石垣

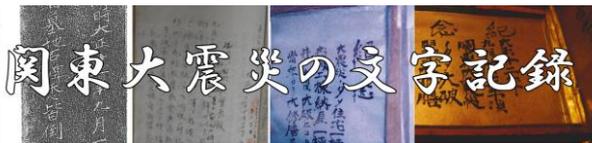
われたと推察される。江戸屋は、瓦の落下や石垣の変形から南から北への強い揺れを受けたと考えられる。星野足袋店では、一階の南側と西側の底の歪み、南北方向の棟瓦の剥落があるが、東西方向の棟瓦はほとんど破損していない。これらのことから、最初に、南南東方向からの強烈な突き上げ強震動があり、次にその揺れに対して直角の揺れが働いたと考えられる。



星野足袋店の屋根の歪み  
(建物は現存せず)



川越台地北縁部  
(旧上福岡地域)における  
関東地震の震害と強震動の  
方向(概念図) (『上福岡市史』資料編  
第1巻(自然史・考古)第41図を一部改変)



関東大震災の記録

1923(大正12年)9月1日、相模湾を震源とするマグニチュード7.9の大地震が発生した。関東全域・静岡・山梨にわたる地帯に大災害を引き起こし、死者・行方不明14万名、全潰全焼流出家屋29万3千戸強に及ぶ未曾有の大震災であった。埼玉県内では死者217名、人間郡では11名に及んだ。福岡村では死傷者・倒壊家屋共になかったが、手紙には震災の体験や差別的なデマがとびかった当時の様子が生々しく語られている。下福岡の民家の壁書きや共同墓地には、墓地の修理を行ったという石碑も建立された。

役場文書では、検査所が損壊するなど蚕糸業に大



下福岡 Y 家の壁書(1995(平成7)年2月撮影)。時刻まで記されている。

拜啓 御手紙延々致してすみませんです、一日の地震よりどうも色々と用や又驚きで心がおちつくくませんで御地方は如何で御ましたか、店に食事をすましてなにごともなしにすわって居ましたらば、みし／＼ぎし／＼と家か動き出し、大いしたことはないと思ふで居ますやいなや、ます／＼はげしく相成まして、とるものとりまぎれ前の桑畑ににげ出でますと、長家は東西におよそ一尺五六寸位ゆれて立どまつて居る事は出来ず、桐木につかまり居まして、其の内にどうやらしづまり後幾面となしにあり、川越方に見舞かたがた行ま(マ)と、南町かじ町通の一流の商店の蔵はちまきは皆ふり落されて又々驚き入り、夕方家にかいつて居ますと東京か火事との話し、吉野の前の(マ)で見るとふけるにしたかつて火はます／＼はげしく、まるでまるで十町か十五六町むこうの方かやけて居るやうな火のむいあがるのかあり／＼と見(マ)いおどろきました(本家も家も大いしたけがはありませんでした)

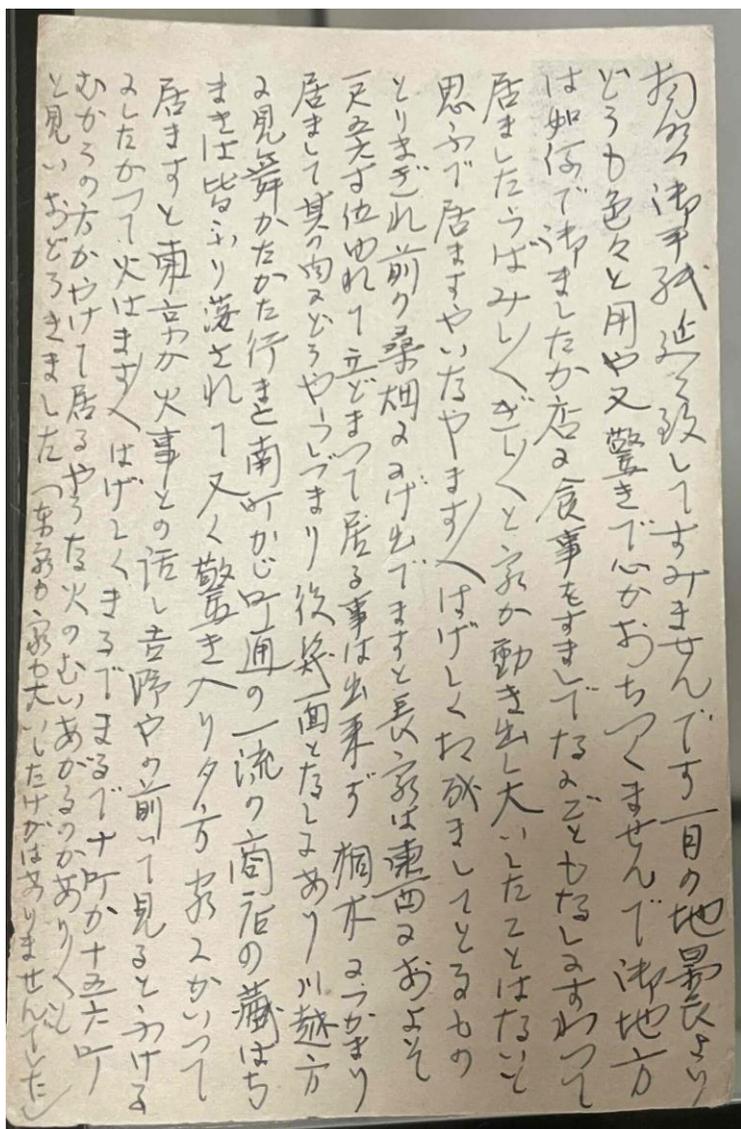
きな被害があり、蚕糸業、農産物に関する共進会イベントの中止や(あつせん)斡旋販売所の閉鎖の善後策、罹(りさい)災者(震災の被害を受けた人)への衣服寄付への呼びかけなど当時のあわただしい様子がうかがわれる。

### 震災を語る手紙

福田屋文書のうち、6通のはがき、手紙を展示しているが、地震の様子が特に克明に記されたはがき1通を紹介する。

### (現代語訳)

拜啓 お手紙のびのびとなりましてすみませんでした。一日の地震によりどうも色々と用事や驚きで心から落ち着くことができません 御地の方ではいかがでしょうか 店で食事を済した後 何事もなく座つておりましたところ みしみしぎしぎしと家が動きだしました。たいした事もないものと思つておりますとますます激しくなりまして 取る物も取りまぎれて前の桑畑に逃込みますと 長家は東西におよそ四十五センチくらい揺れて 立ち止つている事が出来ないで桐の木につかまっていた。そのうちどうやら静まりました後幾回となく地震がありました。川越に見舞かたがた行きますと 南町・鍛冶町通り一流の商店の蔵の一階と二階を区切るひさしが皆ふり落されていて本当に驚きました。夕方に帰つて居りますと東京が火事との話で 吉野家の前で見ると 夜が更けるにしたがい 火はますます激しくなり まるでまるで千メートルか十五・六百メートル位向うの方が焼けているような火の燃えあがるのがありありと見え驚きました。



9月11日付けの地震の記述のあるはがき(福田屋文書)

